

アフリカ女性の「ステキ」を後押しして地域を元気に 安全な自然分娩ができるクリニックが拠点

国際協力機構（JICA）国際協力専門員／保健課題アドバイザーとして活躍する杉下智彦さん。少年時代、ネパールの僻地医療に携わり古切手運動を広めた岩村昇博士の活動に共感し、またアフリカの飢餓報道に触れ、医師を目指した。心臓外科医として勤務後の1995年、青年海外協力隊としてマラウイに渡る。人口200万人の地に医師は自分1人、エイズが蔓延していた時期で、3年で施した手術は3200件、見取った数は7000名余。燃え尽きてしまった。

女性のステキが地域を元気に

「病気になる社会にしないとダメだ」と感じ、ハーバード大学で先端の公衆衛生学を学ぶとともに、伝統儀式的医療などもふまえた医療人類学を研究。アフリカにおける「保健システム強化」の流れを作った。そして、保健課題アドバイザーとして26か国で活動するうちに、出会った事例や現地の人たちとの会話の

中から、今回の起業テーマ「SU*TE*KI」の発想が生まれてきた。

SU*TE*KIは安心できる医療技術と地域助産師との連携による、安全な自然分娩ができるクリニック。同時に、いつまでも美しく健康でありたいという世界の女性共通の願いをサポートすることによって、人生を総合的に支援する。医療クリニックに、ドラッグストア、エステ、ヨガスタジオ、子育てや就活の

相談所などがくっついているイメージだ。女性の元気を通して地域の発展も願う。ライセンスやソーシャルFC制度によって広く展開することで、現地の人による自立発展が期待されている。自然分娩にこだわるのは、母子の絆や



現在、WHOなどの技術委員として、また世界的問題となっているエボラ対策会議や講演など多忙な日々を送る。エボラの感染力が高まり長期化しているのは事実だが、世界が連携して拡大防止に取り組みれば防御は可能とのこと。社会起業大学では志の高い同期生や講師に刺激され、自分もできるという自信と、自分がやらなきゃという使命感をより強くした。



■連絡先

Mail: sutekiafrica@gmail.com

地域の人たちのふれあいを尊ぶ文化を大切にしたいからだ。一部には先進医療が導入されているが、日本同様、病気を診て患者を診ない空気や、病院目線での安全対策、賄賂など、倫理的な問題が出てきていることにも警鐘を鳴らす。

アフリカ発イノベーションに

「妻はアフリカでの活動仲間、2歳の長女はケニア育ちです。2人からの『死ぬ人を減らすばかりじゃダメ、幸せに生きられる社会にしてくちゃ』という助言にも背中を押されました。その娘が飛行機で大泣きしたとき、周囲の人たちが代わる代わるあやしてくれました。日本もかつてはそうでしたが、「子供をみんなで育てる」という風習が根付いているんです。そうした暖かい社会を残していくためにも、必ず成功させたい」

現在プロボノ活動でアフリカを支援するNPOを設立準備中。来年には現地パートナーが、ケニアとタンザニアにクリニックを開設の予定だ。2020年の東京五輪で世界が注目する際に、アフリカ発のSU*TE*KIをリバース・イノベーションとして発信したいという。

シリーズ 社会起業家

JICA国際協力専門員（SU*TE*KIプロジェクト準備中）

杉下智彦氏に聴く